

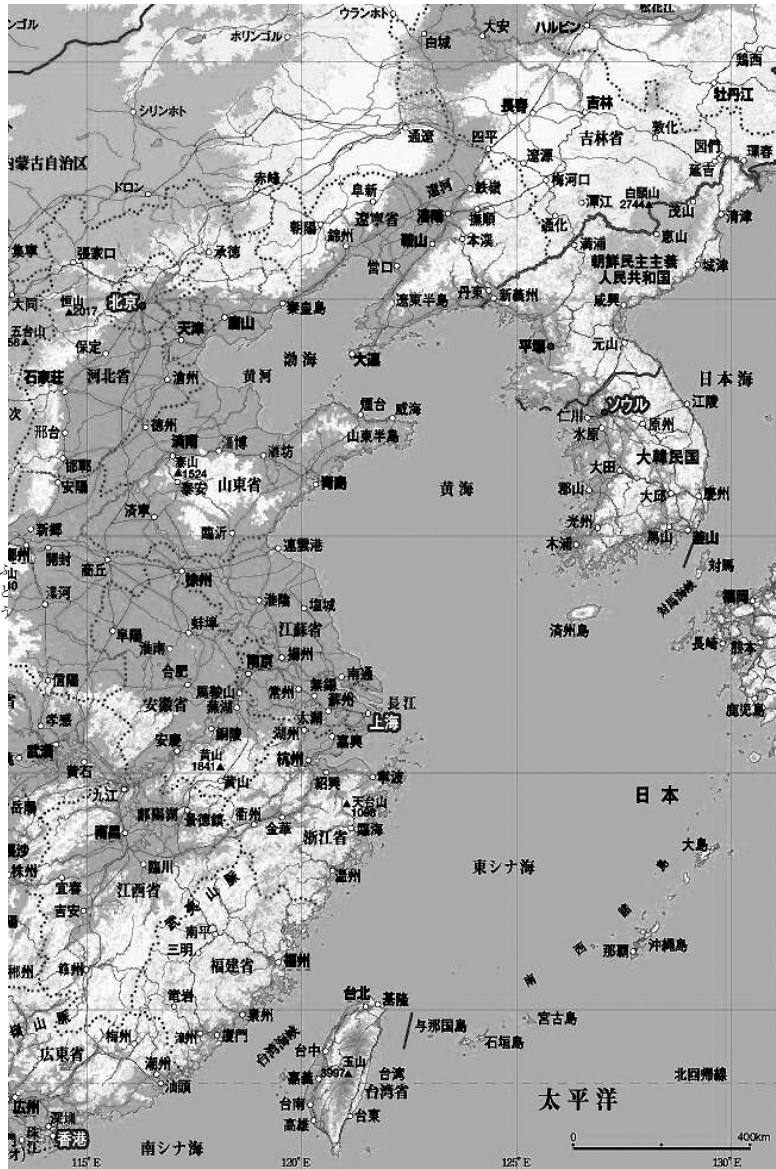
満鉄 中央試験所 大陸に夢をかけた男たち (一)

杉田望

序章 “淡い存在” との出会い

郷愁の町・大連

紅天号は船足を緩め、吃水^{きつすい}を大連港^{だいいれんこう}に入れようとしていた。
いよいよ大運^{だいいれん}である。早朝^{ぼっかいわん}の渤海湾^{ぼっかいわん}は鈍い水色^{だんないみづいろ}をしている。大空からふんわりと甲板に舞い降りてきたのは、中国大陸の大地に舞う柳絮^{りゅうじよ}である。港の入口には、荷下ろし^{へかろし}を待つ貨物船が触先^{へかき}を並べて、二十隻余も停泊^{ていぱく}していた。ここ大連は中国では上海に次ぐ第二の港街である。



私の乗った紅天号は、大連港の第二埠頭に接岸した。

第一埠頭から第四埠頭までは日本植民地時代のままのようである。岸壁に立ち並ぶ倉庫や埠頭の突端まで延びている線路は、当時のものを使っているように見えた。聞いてみると、黒煉瓦で作られた港湾倉庫も、やはり満鉄と関東軍が使っていたものだという。

港湾労働者が忙しく立ち働く埠頭の前方には、高い無機質な埠頭管理ビルが見えた。

その高層ビルの背後に緩やかな稜線を見せているのは、南山であろう。南山の麓には春日池があり、そこから少し下がったところに戦前には市民の憩いの場として賑わった中央公園があるはずである。戦後、中国では日本時代の地名をすべて変え、植民地のイメージを一掃した。弥生町とか山吹町とか、小村公園とかいった日本人には懐かしい地名を大連に住む中国の人々は、今はどんなふうにいるのだろうか。

大連港から宿舍のホテルまでタクシーで五分たらずの距離だった。カーテンを引くと、部屋の窓からは大連の街が一望のもとに開けた。

ヤマトホテルにしても、大連病院にしても大連は日本植民地時代の姿をそのままに残している、と誰かが書いていた。だが、大連は激しく変貌していた。高層ホテルの客室の窓から見える町並みは、私が古い写真で知っているのはあまりにも違っていた。

街中にはホテルやオフィスビルなど、高層ビルが立ち並び、路幅を広げる工事が行われていた。団地ふうの中層住宅は南山の麓まで迫り、旧満鉄の社宅があった伏見町ふしみちやうあたりでは古い住宅が取り壊され、新しい住宅が建設中だった。

大連は新と旧が乱雑に入り乱れながら、急速な勢いで変貌を遂げていた。

南山の頂上に建設中のテレビタワーのような高い鉄塔がある。それが大連の新旧を象徴するエレメントのよう^{よう}に思えた。

五月から六月にかけて大連は最も恵まれた季節で、観光客が賑わう時期でもある。とくに五月の大連は、アカシア並木が白い花びらをつけ、夜になると、それはかぐわしい香りを放つという。

このときも、大勢の日本人観光客が大連を訪れていた。若者もいるが、その多くは六十歳過ぎのお年寄りたちだ。いずれも、戦前、大連に何らかの関わり合いをもっていた人々のようであった。

大連が観光コースとして開放されてから毎年欠かさず観光団に参加しているという、七十歳を過ぎた老人とも出会った。彼は戦前の大連にあって、雑貨商を



営んでいたと話してくれた。その老人だけではなく、戦前、大陸と関わった多くの日本人には、大連とは郷愁を呼ぶ地名のようでもある。大連で生活していた人たちを中心に『大迎合』なる組織もできていると聞いた。戦中派の日本人には、大連に対する思いは特別のようだ。

では、大連は日本人にとってどういう街であったのか。

日本は日清戦争の勝利（一八九五年）で、遼東の権益を一部は確保した。せっかく手にした遼東半島の「権益」は三国干渉によつて、手放さざるを得なくなった。日本に替わつて大連を手にした帝政ロシアは、そこに港と近代的な街を作つた。しかし、日本は三国干渉の恨みをバネに、帝政ロシアに挑み、日露戦争を勝利する（一九〇五年）。こうして、満州大陸の南端に位置する大連を満州の戦略拠点として、日本の版図に組み入れることに成功した。

以後、終戦までの四十年間、日本は大連を租借地として植民地支配することになる。その間、「東洋のパリ」と呼ばれた大連は、アカシアの並木道が連なり、ロシア風の建物が立ち並ぶ瀟洒な表情を見せる裏で、各国のスパイが入り乱れて暗躍し、陰謀が渦巻く港街でもあった。そこには冒険とロマンを求める人々も集まつてきた。しかし同時に大連は、一旗上げようとする軍人や政商、大陸浪人などの陰謀家たちがとぐろを巻く巢窟でもあった。

大連は中国の現代史のなかで交差した人々が深く関わっている。無名の人も有名人もいる。彼らは足早に大連を通り抜けていった。ともかく、日本人には今も昔も大連といえば、ロマンチックなコロニーの郷愁を誘う港町でもあるのだ。しかし、

「正確にいうと、やはり大連は戦前日本の大陸侵略の拠点であり、日本帝国主義が大陸を侵略した玄関口だったのです」

取材の旅の同伴者、盛偉年さんはそんな意味のことを、笑いながらいつていた。表情は穏やかだったが、言葉の厳密な意味では、きついことをいつている。私たち日本人には耳の痛い話だが、まぎれもない事実なのである。



非業の死を遂げた満鉄技術者

でも、私が平成元年（一九八九）五月にこの大連を訪れたのは、そのような郷愁に浸るためではなかった。ある時期から、私のなかに大連－満州－満鉄という言葉の連鎖が、ひっかかり続けていたのである。そして、いつかは自分の足で大連の地を踏み、この目で大連を見たいという思いが募っていった。

そのきっかけは、粗末なパンフレットに出会ったことに始まる。パンフレットには、戦後の中国で非業の死を遂げた満鉄技術者のことが書かれてあった。それを読んで私は、胸を突かれる思いがした。

満鉄技術者とは、旧南満州鉄道株式会社の付属機関・中央試験所で働いていた人々のことである。満鉄関係者が残した記録によれば、戦時下にあつて、満鉄技術者たちは、満州開拓の夢に燃え、国家存亡の危機感を一身に背負い、ひたすら研究に没頭していたのだという。しかし、その一方で、戦火に巻き込まれ、大陸の大地に散った技術者たちも少なくないという。

ちなみに、昭和十五年当時、彼らを取り組んでいた研究テーマをみると、発酵など今でいうバイオ技術、大豆油脂の特殊加工、オイルシールからのガソリン製造、大豆からのアルコール製造、マグネサイトの研究、アルミニウムの研究、石炭系合成樹脂の研究など多岐におよび、それは今でも立派に通用する先端技術である。

それにしても、少数の関係者の間でしか語り継がれていない満鉄技術者たちの存在感はどこか淡い。戦前も戦後も華々しい舞台で活躍し、常にスポットを浴びてきた満鉄調査部などに比べて、満鉄技術者たちの生態は、いかにも密やかなのである。彼らには自己主張の形跡が認められないのだ。

彼らの存在は深い霧に包まれ、私にはぼんやりとしか見えないのである。でも、私にいわせるならば、彼らこそが満州開拓のロマンに生きた本物の男たちということになる。そうした技術集団が、戦前に存在した事実を知ったとき、私は正直驚き、焦点の定まらない感慨にふけったものだった。ともあれ、彼らの存在は、いつの間にか私の胸にずしりと落ちていった。

繰り返し返していうが、彼らには自己主張の形跡はない。密やかなのだ。だから彼らが生きた世界を語る資料はきわめて少ない。しかも彼らは、いずれも高齢者で第一線から身を引いてすでに二十余年の時間が流れている。もはや鬼籍に入った

人も少なくない。自分たちが生きた歴史を、彼ら自身が後世に語り継ぐには歳を取りすぎている。彼らは無言のうちに消えていこうとしている。そうした感慨がますます私を、満鉄技術者の存在を確かめる取材へと駆り立てたのであった。

戦後、『一科学者の回想』と題する書を著している佐藤正則さとうまさのりも、満鉄中央試験所とともに生きた男の一人である。佐藤は終戦の間際まで、満鉄中央試験所の所長を務めた。戦後は、人事院の人事官として活躍した人物で、そのほうが世間では名が通っているかもしれない。

満鉄が経営した研究機関・中央試験所とはどんな組織であったのか、佐藤はこんなふうに書いています。

「ふりかえってみると、満鉄中火試験所の研究環境は、よきにつけ悪しきにつけ、日本の官庁のそれとは比べられない異色のものであった。その心豊かな研究環境は、ときには放漫の誹りそしさえうけた一時期もあつたけれども、チームワークのとれた研究活動とそれから生まれる成果については、常に大きな期待が寄せられて注目を浴びていたものである」

佐藤が書いていることが事実であれば、日本の化学工業の歴史は、書き改める必要がある。それはどの評価を受けるような研究業績を残したということである。こうして、私の取材は佐藤などの満鉄中央試験所関係者が残した、わずかな記録を読むことからスタートを切ることになったのだが、取材は難航が予想された。だが、私は幸運であつた。というのは、今度の取材の過程で、通産省に勤務する友人が満鉄技術に関心を抱き、満鉄技術を研究するために、ある会合を組織している、という話を聞いたからである。それはちょうど四年前のことであつた。

今に引き継ぐ技術

昭和五十九（一九八四）年の三月下旬。夕刻の地下銀虎の門駅一帯は、家路を急ぐ勤め人たちで凄いラッシュであつた。寒風に耐えるかのように人々は首をすくめ、足早に地下鉄の構内に消えていった。その日は、春とは名のみ冷たい北風が吹きすさぶ一日であつた。人混みに逆行して、溜池ためいけのみ向に背筋を伸ばして歩く老人たちの姿があつた。地下鉄虎の門駅からほんの目と鼻の先に彼らが目指すところの霞山会館がある。

老人たちは、いずれも「中試会」の関係者であつた。老人たちが組織する「中

「試会」とは、旧南満州鉄道株式会社の付属研究機関・中央試験所で働いた人々の親睦団体のことである。彼らはすでに平均年齢七十五歳を超えているだろうか。午後六時半、老人たちは霞山会館の最上階にある会議室の椅子に腰を下ろしていた。メンバーのなかには、中試会の事務局局長役を務める田中喜一郎（たなかきいちろう、まるおしげる）、丸尾茂、五十嵐正次（いがらししょうじ、おおぎときまつ）などの姿があった。

その目、満鉄中央試験所関係者を集め、会合を催したのは通産省官房企画室の橋本久義（はしもとひさよし）企画官（現・中小企業庁技術課長）であった。出席者たちはいくぶん上気した顔をしていた。橋本企画官は、ゆつくりと会場を見渡してから、こう切り出した。

「本日、皆さんにお集まりいただいたのは、中央試験所がどんな研究業績を残したか、それがまた、技術の系譜として見た場合、戦後にどのように引き継がれたか、引き継がれなかったのか。私ども通産省が産業技術政策を検討する上で、満鉄中央試験所の経験を生かすことができないか……狙いはそういうことです」

老人たちは大きく頷うなずいた。こうした公的な場所で満鉄中央試験所の評価を巡って議論が交わされることなど、戦後四十年も経過しているというのに、かつてなかったことだ。指名を受けて、最初に口火を切ったのは丸尾茂である。

「いや、こういう機会を作っていただき、木当はこちらからお礼を申したい。生き証人はほとんどいませんからね、私はあと二カ月で七十九歳になりますが、生き証人ということでは、私あたりがリミットでしょうね」

こうして初めて満鉄関係者自身の口から、満鉄中央試験所の全容が明らかにされることになるのである。数ある満鉄に関する調査研究のなかでも、中央試験所に焦点を当て、本格的な研究が行われたのは、おそらく、これが最初のものであろう。

研究会は翌六十年まで続けられた。その間に、延べ二十余人におよぶ旧満鉄技術者が出席し、当時の研究内容を詳細に報告している。また、研究会には大勢の若い通産省の技官が参加して、先輩技術者と活発な議論を交わしたものだっ

た。橋本企画官が主催した研究会は、正式には「技術による経済安全保障に関する調査研究」の一分科会として組織されたもので、省内では別名「技術安保研究会」と呼ばれていた。成果は昭和六十一年五月に日本機械工業連合会から『満鉄中央

試験所の活動』と題する報告書としてまとめられている。A4判の四十頁足らずの小冊子である。「技術安保研究会」は、そのなかで満鉄中央試験所の活動を次のように評価している。

「中央試験所の研究を基礎として工業化された企業は十指に余り、この他にも試験所の指導によって大成されたものは枚挙にいとまなく、満州の化学工業は実に中央試験所を離れて考え難いといえるものであった。また、単に工業の発展に寄与したのみでなく、同所が本邦における化学の研究、技術の向上に有形無形に貢献したところは極めて多く、その地位は単に満鉄の研究機関にとどまらず、東洋における科学技術の殿堂として誇りうるまでに允展したのであった」

背丈では通産省一ではないかと評判の橋本久義は、東大工学部で精密機械を専攻した逸材である。橋本はいう。

「満鉄が開発した技術で、やはり特筆されるのは、今の言葉でいえば、代替エネルギーだったと思います。それは当時の時代状況の反映でもあるのですが、松脂からグリスを製造する方法とか、コウリヤンから高級アルコールを取るとか、あの有名な石炭液化やオイルシェールの開発以外にも、たくさん、技術萌芽を生み出しています」

満鉄中央試験所の技術が再評価されたのは、第二次石油危機が日本を襲った直後に石炭液化が見直されたときだった。通産省の外郭団体である特殊法人・新エネルギー開発機構が石炭液化の実用化研究に取り組んだ。そのとき、旧満鉄技術者たちは協力を借しまなかつたという。

もちろん、当時と現在では比べるべきもないほど、技術は進歩し、磨きがかけられている。それでも、満鉄技術は枯渇することなく、脈々と生きていたという。その関係者は技術にまつた多くの素人の私にもわかるように、こう説明してくれた。「石油危機で浮上した満鉄の石炭液化技術や合成ガソリン製造技術などは、いずれも、満鉄が軍の要請に応えて、戦時下の威しい状況で開発した技術だったので。さしあたって満鉄中央試験所は軍の要請で、絶対的に不足していたガソリンの代用品の開発を急いだ。時代の状況が当時と似ているのですね。合成ガソリンを必要とする時代が再びやってくるとは思いませんでした」

満鉄中央試験所の技術が今日までも生き続けている——この事実には私は驚きを感じるとともに、そもそも満鉄中央試験所とはいかなる経緯で発足し、その後

どう歩んできたのか、そこにはどんな技術者たちが集まり何をやってきたのか、また、満鉄中央試験所が消滅した戦後、その技術はどう継承されていたのか、に強く興味を引かれた。それを調べるのが自分に与えられた仕事ではないか、と思うようになっていた。

満鉄技術者の生きざま

橋本が主催した「技術安保研究会」は、公式な報告書のほかに膨大な関係者の証言集を残している。そこには、数多くの感動的な物語が記録されていた。

このドキュメントを構想するにあたって、私は、誰でもたいていはそうするように関係した膨大な資料を読み漁り、それを整理することから始めた。『実録満鉄調査部』という長編ノンフィクションを書き下ろした草柳大蔵そうやきたいざうも、ひと通り資料に目を通すだけで、三年の歳月を費やしたと告白している。この種の手がける場合、手法としてはそれが常套じょうとうというものだろう。

私は満鉄関係者が残した証言集を幾度も読み返すことから、この作業を始めた。さらに手元にある旧満鉄関係の資料を手当たり次第に読んでみた。そして、関係者から直接話を聞いてみたいと思うようになった。

関係者は私の取材に好意的に協力してくれた。彼らは彼らが生きてきた時代と体験を熱心に語ってくれた。

関係者の取材を進めるうちに、戦前の満鉄中央試験所は「東洋に誇る科学の殿堂」と呼ばれたというのは、誇張でないと確信を持つようになった。研究業績では理化学研究所に匹敵するか、それに勝るとも劣らぬ研究業績を残しているとの評価も偽りではないと思うようになった。

とりわけ、石炭液化やオイルシェールの研究では、当時、世界でも屈指の研究機関として名声を博した。その技術の系譜は何も日本国内にとどまる話ではない。国際的な広がりを見せ、オーストラリアでは石炭液化プロジェクトが動いている。南アフリカの石炭液化計画も技術の系譜を辿れば、ドイツを源流とする満鉄の技術につきあたるともいう。さらに技術の系譜を追うならば、砂糖キビを原料とするブラジルの「人造ガソリン工業化」にまで広がりを持っている。

満鉄の技術といえ、ば、「あじあ号」を大連を起点にインドまで走らせる研究を進めていた満鉄鉄道技術研究所が有名かもしれないが、満鉄中央試験所は鉄道を

業の枠を超えた科学技術の分野で先鋭的な研究をしていたといえる。余談になるが、鉄道技術研究所で当時立案されたものには、新幹線計画があり、さらには北京－広州を結ぶ大陸縦断鉄道構想もあった。その大陸縦断鉄道構想は今、再び「日中経済技術協力」の案件として浮上してきている。

こうした満鉄中央試験所の技術の素晴らしさを取材を通して知っていくと同時に、私は別の感慨を持つようになっていた。満鉄技術者の証言のなかから、満鉄に生きた彼らの感動的な生きざまに出会うことができたからである。この感銘は私の満鉄技術者に対するイメージを膨らませ、ますます取材に熱が入ってきた。

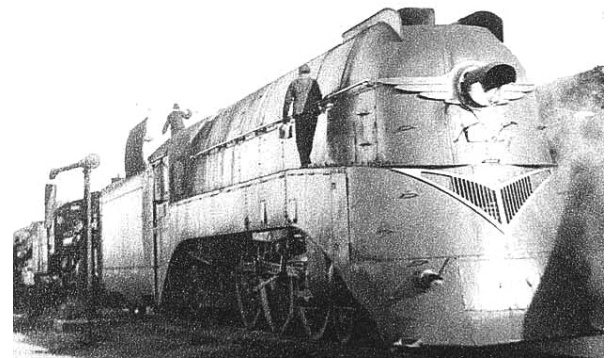
私は今度の取材という旅のなかで、今は亡きひとりの人物と出会うことができた。その人は中央試験所の最後の所長を務めた丸沢常哉^{まるさわつねや}である。佐藤正典の恩師ともいえる人物で、二人は太い絆で結ばれた師弟の関係にあった。

丸沢は終戦の混乱のなかで、中央試験所の研究施設と研究資産を守り、それを新中国に引き渡すことに命を賭け、自ら進んで新中国建設に参加した希有^{けう}な人物でもある。丸沢とともに多くの満鉄技術者が戦後も引き続き激動の中国に残留して、技術の火を絶やさず燃え続けさせたことは、今日の中国の工業力に多大な財産を残すことになったと思う。戦前、戦後の中国大陸にあつて、卓抜した指導力を発揮し、満鉄技術者を率いた丸沢常哉に人間の大きさ、魅力を感じるのは私だけではないはずだ。

佐藤正典が異色な研究組織と呼び、丸沢常哉が命を賭けて守ったという満鉄中央試験所。――そこで彼らはどんな研究を手がけ、どんな生き方をしたのか……。とりわけ、興味をそられるのが、戦後、中国大陸に残った満鉄技術者たちの精神的支柱となった丸沢という人物である。

結論を先にいえば、丸沢たちは戦後の中国で戦争責任を果たし、友好の実を残した。満鉄と満鉄技術者は、中国の大地に花を咲かせ、自らは散っていったのである。

中国が発表している文献を読むかぎりであれば、満鉄の果たした歴史的役割に



関する評価はまことに厳しい。だが、中国は鄧小平のもとで開放政策を採ってからというもの、満鉄に関する研究が本格的に始まった、という話を関係者から聞いた。それだけでなく、大連や瀋陽しんやうに戦前、満鉄と関わりを持った中国人が、満鉄関係者が組織する親睦団体に「特別会員」として名を連ねているとのことである。

彼らは満鉄と満鉄技術者を、終戦から半世紀近く経過した現在、どのように評価しているのだろうか。満鉄が残した技術は、解放後の中国の国家建設に本当に役立つたの、であろうか。興味深いことである。

それを確認してみたいと思った。そして、何よりも満鉄技術者たちが生きた「満州の風土」を、この目で確かめてみたいと思った。関係者の間を訪ね歩くうちに、そんな感慨が広がりを増していったのだ。

満鉄マンたちが用いた手法がそうであったように、まず「フィールド・ワーク」が必要である。そういうわけで、私は大勢の満鉄技術者がロマンを膨らませた中国大陸に、取材を広げることにしたのである。

まず最初は満鉄中央試験所が本拠を構えた大連である。次にはかつて新京と呼ばれた長春である。そして、奉天ほうてんと呼ばれた瀋陽、撫順ぶじゅん、ハルビンにフィールド・ワークを広げる取材計画を立てた。

次から次へと私のプランが膨らみを増していったのだ。

初めての大連は、晴天に恵まれた。アカシアの白い花は急いではいたけれど、五月の遼東の空は、あくまでも紺碧こんぺきに晴れ上がっていた。私は大連を訪ねた翌日、満鉄中央試験所の門の前に立った。

その風景は、取材を通して私の頭のなかに焼きついていく往時の風景と寸分も違わないものと思われた。私は中央試験所のあたりを敗策しながら、戦前の満鉄技術者たちのことに思いを巡らせてみた。フィールド・ワークの手応えと満鉄技術者たちの息づかいが、歴史の彼方から確実に伝わってくるようである。

(つづく)

なお、挿入されている写真は原著とはことなり、戦略経営研究所の責任で入れさせていただいた。著作権などの問題がないように努めているが、万が一の場合には、ご容赦お願いする次第である。

戦前の大連風景など…

<http://www.dce-osaka-sandai.ac.jp/~funitak/photo/index.html>

<http://tokyotampo.80cocode.com/sriyou/manshu.html>

「あじあ号」：http://www.khi.co.jp/sharyo/since_fmai/since_1934.html